

六条齋院祿子内親王歌合注釈(九)

〔天喜五年〕九月十三日 / 〔某年立秋旦〕
某年二月十余日

加藤 幹子

本文は『新編国歌大観』(86六天五、87六条秋、91桜柳合)を用い、『平安朝歌合大成』(二六九、一七〇、一八〇)を参照して表記を改めた。

〔天喜五年〕九月十三日六条齋院祿子内親王歌合

同齋院歌合

題

九月十三夜

左

宮殿

1 今宵しもなか光のまさるらむ出で添ふ月はあらじと思ふに

- 2 あらたまる月の色さへ曇らねばなほ身にしむは秋の空かな
右 宣旨
- 3 秋の月ひるにまされば暁の鐘つく人もいかが分くべき
左 美作
- 4 さやかなる秋の月には暮れぬとも明けゆく空も知られざりけり
右 讃岐
- 5 秋ごとにこよひの月は見しかどもかばかり照らす影はなかりき
左 中務
- 6 秋の月いつもさやかに照らせどもこよひばかりの光なきかな
右 左衛門
- 7 長月の長き夜照らす月を見てまた暮れぬ日と思ひけるかな
左 出羽
- 8 茜さす光とぞみる名にたかき月はまことに今宵なりけり
右 丹後
- 9 葛城の神やわぶらむ茜さす光と見ゆる秋の夜の月
左 小馬
- 10 いつとても眺むる空はかはらねど光ことなる秋の夜の月
右 式部

同齋院歌合

題

九月十三夜

左

宮殿

1 今宵しもなどが光のまさるらむ 出で添ふ月はあらじと思ふに

【語釈】

九月十三夜 九月十三日の月は、八月十五夜の名月に次ぎ美しいと言われ、月見の宴が催された。「九月十三夜の月を歌題にしたものは、他に類例を見ない」という（『平安朝歌合大成』一六九）。

出で添ふ 同時代以前の「出で添ふ」の用例は、管見に入った限りでは「日の光出で添ふ今日のしぐるるはいづれの方の山辺なるらん」（『大鏡』昔物語 朱雀院）のみである。光をさし添える、の意でとつたが、「出で添ふ月」という表現からは「月に寄り添う月（＝月が二つある）」という印象を受ける。本歌合以前に詠まれた宮殿の歌は素直な詠みぶりのものが多い。あるいは「二つお月様があるわけでもないのに、どうしてこのように明るいのか」といった素直な気持ちを詠んだものであるのかもしれない。

【現代語訳】

他でもない今夜はどつして光がいつもより明るいのでしょうか、月に（光を）さし添えるものはないだろうと思つのですが。

右

宣言

2 あらたまる月の色さへ曇らねばなほ身にしむは秋の空かな

【語釈】

あらたまる月の 「月」は曆の月と天体の月の意。八月の名月から月が改まり、九月十三夜になったことをいう。

【現代語訳】

九月になって月も月の色も（八月十五夜のものと同様ならず）明るいで、やはり身にしみて感じられるものは秋の夜空ですね。

左

美作

3 秋の月昼にまされば 暁の鐘つく人もいかが分くべき

【語釈】

暁の鐘つく人も 「暁の鐘」は夜明けを報せるためにつく鐘のこと。暁は寅の刻（現在の午前三時～五時）に当たるといふ。平安時代、日付の境界は丑寅の刻の境であったといふので、「暁の鐘」とはその時につかれた鐘のことをいっているのであるうか。

【現代語訳】

秋の月明かりは昼よりも明るいので、夜明けを告げる鐘をつく人も（昼か夜かを）どう判断しているのでしょうか。

右

讃岐

4 さやかなる秋の月には暮れぬとも明けゆく空も知られざりけり

【語釈】

さやかなる秋の月には 夏に比べ空気が澄む秋の月は、明るく感じられる。それを意識しての表現であろう。あるいは、歌題が「九月十三夜」であることを考えると、八月十五夜の月と比べて「さやか」だという意味で捉えるべきか。

【現代語訳】

（これまで気づきませんでした）明るい秋の月明かりの中では、日が暮れたとも夜が明けゆく空だとも気づくことができなかつたのですね。

左

中務

5 秋ことに今宵の月は見しかどもかばかり照らす影はなかりき

【語釈】

今宵の月は 「今宵の月」は今夜の月の意だが、これまでに観てきた九月十三夜の月のことをいうであらう。

【現代語訳】

秋が来る度に今夜（九月十三夜）の月は見てきましたが、これほど照らす月明かりはありませんでしたよ。

右

左衛門

6 秋の月いつもさやかに照らせども 今宵ばかりの光なきかな

【語釈】

今宵ばかりの光なきかな 旧暦では七・八・九月が秋に当たる。中でも秋の深まる九月は、七・八月に比べ月の光が冴えてくる。その光の違いをいつか。

【現代語訳】

秋の月はいつも明るく照らすものですが、今夜ほどの（明るく美しい）光はありませんね。

左

出羽

7 長月の長き夜照らす月を見てまだ暮れぬ日と思ひけるかな

【語釈】

長月の長き夜 「長月の長き夜」とは、九月の夜長であることをいう。また、「長月の」は「長き」を導く語。

【現代語訳】

九月の長い夜を照らす月を目にして、まだ陽の沈まない昼間だと錯覚したことです。

右

丹後

8 茜さす光とぞみる 名にたかき 月はまことに今宵なりけり

【語釈】

茜さす 「茜さす」は枕詞で、「光」にかかる。

名に高き 二十巻本重複書写本断簡には「なもたかき」とある。「中右記」保延元年九月十三日条に「今夜雲浄月明、是寛平法皇今夜明月無双之由被仰出云々」と宇多法皇が九月十三夜の月を賞讃したということが書かれている。このことを意識しての表現か。

月はまことに今宵なりけり 「は……なりけり」で、今初めてそのことに気づいた、という意味を表す。

【現代語訳】

すばらしい光だと分かりました、噂に名高い月は本当に今夜のものであったのですね。

左

小馬

9 葛城の神やわぶらむ 茜さす光と見ゆる秋の夜の月

【語釈】

葛城の神や 「葛城の神」は奈良県葛城山の神で、特に一言主神を指す。一言主神は、容貌が醜いため夜間だけ働いたとも言い、「暁にはとく下りなんといそがるる。」「葛城の神もしばし」など仰せらるるを、いかでかはすぢかひご覽ぜられんとて、なほ伏したれば、御格子もまるらず。」「枕草子」宮にはじめてまゐりたるころ（）など、醜い外見を恥じたり、昼間や明るい場所を恥じたりすることの比喩にも用いられた。

茜さす 「茜さす」は枕詞で、「光」にかかる。

【現代語訳】

葛城の神様も今ごろお困りでしょう、赤く照り映える光だと思われる秋の夜の月ですから。

右

式部

10 ひとつとても眺むる空はかはらねど光ことなる秋の夜の月

【語釈】

ひとつとても ひとつであっても。「ひとつとても月みぬ秋はなきものをわきてこよひのめづらしきかな」(後撰和歌集) 卷六 秋歌中 藤原雅正(一)

【現代語訳】

ひとつであっても眺める空は変わらないのに、光は異なるものなのです、秋の夜の月は。

「某年立秋日」六条斎院祓子内親王歌合

同院歌合

題 秋立

歌人 丹後 美作

出羽

遠江 左衛門

武蔵 駒君

式部 中務

左

美作

1 秋立つと思ふからにぞ身にもしむときはに吹きし松の風さへ

右

宣旨

2 芦の葉ぞ今日はほのかにそよくなる秋立つ風のしるしばかりに

左

遠江

3 夏過ぎてまだほどもなき風の音を秋のしるしと今日は聞くかな

右

武蔵

4 いつのまに風の気色もかはるらむ今日こそ秋のはじめと思ふに

左

中務

5 うちつけに衣の裾の露けきは秋たち来たる今日のしるしか

右

丹後

6 今日やさは秋のはじめになりにつむむべこそ月もさやかなりけれ

左

出羽

7 風の音ぞしるく聞こゆる夕まぐれ今日立ちかはる秋のはじめと

8 初秋のたつしるしにや吹く風の今朝はひとへに涼しかるらむ
右 左衛門

左 小馬

9 秋立つと聞くより今日のうちつけに風も身にしむ心ちこそすれ
右 式部

10 わが宿の萩吹く風の音にこそ今日初秋とおどろかれぬれ

同院歌合

題 秋立

歌人 美作
丹後

出羽 宣旨

左衛門 遠江

騎 武藏

式部 務

左

美作

1 秋立つと思ふからにぞ身にもしむ ときはに吹きし松の風さへ

【語釈】

秋立つと 「秋立つ」は「立秋」の訓読語。二十四節氣の立秋の日が来たことをいう。

ときはに 「ときは」は常緑樹のことだが、ここでは「松の風」が一年中色の変わらない緑色であること

をいうか。「松風は色や緑に吹きつらん物思ふ人の身にぞしみぬる」(『後拾遺和歌集』卷十七 雑三 堀河女

御)、「秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらむ」(『詞花和歌集』卷三 秋 和泉式部)。

「秋来れば常磐の山の山風も移るばかりに身にぞしみける」(辰翰本『和泉式部集』)

【現代語訳】

(今日は) 立秋だと思つ、ただそれだけのことで、身にもしみて感じられますね、一年中色の変わらない緑色に吹く松の風でさえ。

右

宣旨

2 芦の葉ぞ今日はほのかに そよくなる秋立つ風のしるしばかりに

【語釈】

芦の葉ぞ 「芦」はその根や葉が歌に詠まれることが多いが、秋風や立秋とともに詠まれた歌はこの頃までのものでは見当たらない。新しい取り合わせに挑戦したか。秋風とともに詠まれることの多いものとしては荻や稲葉などがある。

そよくなる 「そよぐ」は風に吹かれて揺れること、またそよそよと音を立てることをいう。

【現代語訳】

芦の葉が今日はほのかにそよそよと音を立てているようですね、秋になった風の証拠と言わんばかりに。

左

遠江

3 夏過ぎてまだほどもなき 風の音を秋のしるしと今日は聞くかな

【語釈】

風の音を秋のしるしと 参考歌「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかわねぬる」（古今

和歌集 卷四 秋歌上 藤原敏行）。

【現代語訳】

夏が過ぎてまだ間もない風の音ですが、立秋の今日は秋の来た証拠だと聞くことです。

右

武蔵

4 いつのまに風の気色もかはるらむ 今日こそ秋のはじめと思ふに

【語釈】

いつのまに 完了や過去を表す語を伴わずに現在推量の「らむ」と結びつけた例は「いつのまにふりつもるらむ吉野の山のかひよりくづれおつる雪」（『後撰和歌集』卷十七 雑歌三 源昇）、「いつのまに空のけしきのかはるらんはげしき今朝の木枯らしの風」（『新古今和歌集』卷六 冬歌 津守国基）などがあるが、目で見、視覚的に確認出来ることについていう場合が多い。

今日こそ秋の 『万代集』卷四に「今日こそ秋は」として入集。

【現代語訳】

いつの間に夏風も秋風に変わっていたのでしょうか、（他でもない立秋の）今日こそが秋の初めだと思いますの。

左

中務

5 うちつけに衣の裾の露けきは 秋たち来たる今日のしるしか

【語釈】

うちつけに 「うちつけ」は急だ、突然だの意。参考歌「うちつけに袂涼しくおぼゆるは衣に秋はきたる

なりけり」(『後拾遺和歌集』卷四 秋上 よみ人しらず)

秋たち来たる 「たち」は「秋立ち」と「裁ち」の掛詞。「うち(打ち)」「衣」「裾」「裁ち」は縁語

【現代語訳】

突然衣の裾が露に濡れて湿っぽくなっているのは、立秋が来て秋になった今日の証拠だったのでね。

右

丹後

6 今日やさは秋のはじめになり^にけむむへこそ月もさやかなりけれ

【語釈】

むへこそ 「うへこそ」「とも。なるほどの意。

【現代語訳】

それでは今日秋の初めになっていたのでしょう。なるほど(だから)月も(夏の月よりも)明るいですね。

左

出羽

7 風の音ぞしるく聞こゆる夕まぐれ今日立ちかはる秋のはじめと

【語釈】

夕まぐれ 「まぐれ」は「目暗^{まぐれ}」の意味で、夕方の薄暗いことをいう。辺りが暗いことで視覚ではなく、聴覚が研ぎ澄まされる。そのため、「夕まぐれ萩吹く風の音聞けば袂よりこそ露はこぼるれ」（千載和歌集）
 卷四 秋歌上 藤原季経（のように、音に関する事柄とともに詠まれることが多い。

【現代語訳】

風の音が（昨日までのそれと変わったと）はつきりと聞こえる夕暮れですね、今日季節が変わった秋の初めだ
 と思つて。

右

左衛門

8 初秋の たつしるしにや吹く風の今朝は ひとへに涼しかるらむ

【語釈】

たつ 「初秋の」立つ」に「裁つ」の意を響かせる。

ひとへに ひとすらの意の「ひとへに」に夏の衣服である「単衣」の意を重ねる。「裁つ」と「単衣」は

縁語。

【現代語訳】

初秋の来た証でしょうか、（立秋の）今朝吹く風は夏の単衣ではひたすら涼しく感じることでしょ。

左

小馬

9 秋立つと聞くより今日の
うちつけに風も身にしむ心ちこそすれ

【語釈】

今日の 四句の「風」にかかる。二十卷本卷七所収「康平七年十二月晦日庚申 禊子内親王歌合」の断簡では「今日は」となっている。「今日は」とある方が落ち着きは良いが、平板な詠みぶりになる。

うちつけに 「うちつけに」という語は立秋と取り合わされることが多いようで、本歌合ら番中務詠とその語釈に挙げた用例の他に、「うちつけにものぞ悲しき木の葉散る秋のはじめを今日ぞと思へば」（後撰和歌集）巻四 秋上 よみ人知らず）などがある。

【現代語訳】

立秋が来たと聞いてから、今日の風も急に身にしみて感じられる気がします。

10 わが宿の 萩吹く風の音にこそ今日初秋とおどろかれぬれ

【語釈】

わが宿の 参考歌「秋立つ日よみはべりける 秋立つと聞きつるからにわが宿の萩の葉風の吹きかはらむ」(『千載和歌集』巻四 秋歌上 侍従乳母)

萩吹く風の音にこそ 「萩」を詠んだ歌は勅撰集では『後撰和歌集』以降に見られる。中でも、「いとどしく物思ふ宿の萩の葉に秋と告げつる風のわびしさ」(『後撰和歌集』巻五 秋歌上 よみ人しらず)など、「風」との取り合わせた例が多い。

【現代語訳】

わが宿の萩に吹く風の音を聞いて、今日が秋の初めなのだとはっと気づかされたことです。

本歌合の7番出羽詠以降の四首は、「康平七年十二月晦日庚申」に行われた祓子内親王歌合の断簡として二十卷本巻七にも収録されている(『平安朝歌合大成』一七九。「歳暮」と「秋立日(立秋日)」二題であったと目録にあるが、二十卷本にはこの時に詠まれた「歳暮」題の歌は残っていない。以下の二首は、「康平七年十二月晦日庚申」の祓子内親王歌合において「歳暮」題で詠まれたものの一部であるかと思われるものである。

『夫木和歌抄』卷十八

祿子内親王家歌合 歳暮 宣旨

ふる年といふなをやらぶ音高み 春をいとふと人や聞くらむ

【語釈】

ふる年と 「ふる年」は新年に対して旧年、去年のことをいう。

なをやらぶ 「な」は「名」と「雛」の掛詞。「雛」は追雛ともいい、現在の節分の原因となった行事。十

二月晦日の夜、「なやらぶ（雛やらぶ）」などのかけ声をかけながら一年のうちに溜まつた邪気を祓い、新しい年を迎える。

春をいとふと人や聞くらむ 康平七年は十二月二十一日に立春を迎えている。この宣旨の歌が康平七年に詠まれたものであるならば、追雛によって追いやられる旧年の中には春も含まれていることになる。そのため、追雛の声が大きいことと、春を嫌っているのではないかと誤解されるのではないかと、という一見理屈の通らない結びつけがされているのであろう。なお、年内立春を詠んだ歌としては「年のうちに春は来にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ」（『古今和歌集』巻一 春歌上 在原元方）が有名である。

【現代語訳】

去年という名を追いやろうとするように、追雛で悪鬼を追いやる音がやけに大きく響くので、春を疎ましく思っているのではと人は聞いて（勘違いして）いるのでしょうか。

『万代和歌集』巻六

禊子内親王家武威

年ははや 今日の限りになりにけり何をしてかは過ぐし来つらむ

【語釈】

今日の限りに 「限り」は果て、最後の意味。

【現代語訳】

一年はもう今日という最後の日になってしまったのですね、何をして（今年一年を）過してきたのでしょうか。

某年三月十余日祿子内親王歌合

祿子内親王家和歌合

三月十余日、桜のさかりに、御前のが、いみじうめでたく咲きたるを、おなじうは方分きて、柳、桜あはせてこ覽せさせむとて、他のも、めでたきどもをたづねて、植ゑ集めさせて。

桜

一番 左

中務

1 くまもなくたづねて折れる山桜ならば匂ひはあらじと思ふ

右

式部

2 散ることもならはでぞ咲く風吹けど木末のどけき宿の桜は

二番 左

小式部

3 雪かとぞよそに見つれど桜花折りてはきたる色のなきかな

右

美作

4 あしひきの山の端よりは出でねども花こそ春の光なりけれ

柳

三番 左

甲斐

5 春ごとに見る青柳の糸なれどかかるなびきの枝はなかりき

右

兵衛

6 繰り返し過ぎにし春もゆくすゑもかかる柳の糸やなからむ

四番 左

小式部

7 玉光る糸かと思ゆる青柳になびかぬ人はあらしとぞ思ふ

右

美作

8 ねぬなはの心ちこそすれ汀にて柳の糸は繰れど尽きせず

祿子内親王家和歌合

三月十余日、桜のさかりに、御前のが、いみじうめでたく咲きたるを、おなじうは方分きて、柳、桜あはせてご覧させむとて、他のも、めでたきどもをたづねて、植ゑ集めさせて。

桜

一番 左

中務

1 くまもなくたづねて折れる 山桜ならぶにほひはあらじと思ふ

【語釈】

三月十余日 いつの「三月」であるかは不明だが、類従歌合巻第七に編入されていることから、祿子内親王の齋院退下後に催された歌合であると考えられる。

方分きて 「方分く」は物合わせなど左右に分かれて行う遊びや競技で組を分けることをいう。

柳、桜あはせて 春の景物である柳と桜の取り合わせは、「見渡せば柳桜をこきませて都ぞ春の錦なりけれ」（『古今和歌集』巻一 春歌上 素性）などと賞讃された。

山桜 仮名日記中の「めでたきどもを」たづねて「や初・二句」くまもなくたづねて折れる」と呼応する表現。

【現代語訳】

すみずみまで探し求めて手折ってきたこれらの山桜ですが、（その中にさえ）ここの桜に匹敵する美しさはな

いと思います。

右

2 散ることも ならはでぞ咲く風吹けど木末のどけき 宿の桜は

式部

【語釈】

ならはでぞ咲く 二十巻本では「ならはてそ」のあと二字を欠く。宮内本「ならはてそさけ」、群書類従本「ならはてそさく」とある。係助詞「そ(ぞ)」の結びであることを考え、群書類従本によつて補った。

宿の桜は 左歌の「山桜」に対応する語。邸の敷地内に植えられた桜は、周囲に建物などがあるため山の桜に比べて風が当たりにくく、枝が揺れることもない、という発想であろう。

【現代語訳】

散ることも知らずに咲いていますよ、風が吹いても邸の中に植えられている桜は梢も穏やかで。

二番 左

小式部

3 雪かたとそよそに見つれど桜花折りては きたる色のなきかな

【語釈】

雪かとぞよそに見つれど 『万代和歌集』 卷二には「雪かとてよそにみつれば」として入集。桜の花を雪と見紛つ、あるいは雪に見立てるといふ詠み方は、「み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける」(『古今和歌集』 卷一 春歌上 紀友則) など用例が多い。

きたる色のなきかな 『玉葉和歌集』 卷二では「似たる色なかりけり」、『万代和歌集』 卷二では「似たる色のなきかな」として入集。「きたる色」では意が通らないので、「似たる色」として解した。

【現代語訳】

雪であろうかと思つて遠目に見ていましたが、桜花を折つて(近くで見て)みると、(他に)似ている色はありませんね。

右

美作

4 あしひきの山の端よりは出でねども 花こそ春の光なりけれ

【語釈】

あしひきの 「山」を導く枕詞。

花こそ春の光なりけれ

『狭衣物語』 卷一冒頭に源氏の宮が「花こそ花の」と口ずさみながら山吹を手にする場面がある。伝本によっては「花こそ春の」となっている本文もあり、この歌が引歌として指摘されてい

る（森下純昭氏「狭衣物語」冒頭部「花こそ春の」引歌考）。

【現代語訳】

山の端から出るものではないけれど、桜の花こそが春の光であったのですね。

柳

三番 左

甲斐

5 春ごとに見る 青柳の糸なれどかかる なびきの枝はなかりき

【語釈】

青柳の糸 「青柳の糸」はしだれ柳の枝を糸と表現したもの。「青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける」（『古今和歌集』巻一 春歌上 紀貫之）など、用例は多い。

なびきの 「なびき」は揺れ動くこと、またその様子をいう。

【現代語訳】

春が来るたびに見る青柳の糸ですが、このように綺麗に揺れる枝は見たことはありませんでしたよ。

右

兵衛

6 繰り返し過ぎにし春もゆくすゑもかかる柳の糸やなからむ

【語釈】

繰り返し 「繰り」と「糸」は縁語

【現代語訳】

幾度も過ぎ去っていった春も、これから先も、このような美しい柳の糸はないだろうと思いますよ。

四番 左

小式部

7 玉光る糸かと思ゆる青柳になびかぬ人はあらじと思ふ

【語釈】

玉光る 「玉光る」とは宝玉のように美しく光ることをいう。「浅緑 濃い縹 染めかけたりとも 見るま
 でに 玉光る 下光る 新京朱雀の したれ柳 またはた井となる 前栽秋萩 撫子蜀葵 したり柳」(催馬
 楽「浅緑」)

【現代語訳】

宝玉のように美しく光る糸であろうかと思える青柳には、心を寄せぬ人はいないだろうと思いますよ。

右

美作

8 ねぬなはの心ちこそすれ汀にて柳の糸は繰れど尽きせず

【語釈】

ねぬなはの 「ねぬなは」は蓴菜（水草の一種）のこと。たぐり寄せるようにして収穫をする。
糸は 「糸」と「繰れ」は縁語。

【現代語訳】

（まるで）ねぬなはのような心地がしますね、水のほとりてたぐり寄せても尽きることはない柳の糸は。